

2010年9月15日

母は息もて電火創るチェホフ忌／修司

早熟の俳人だった寺山修司は、チェホフを詠み込んだ句をいくつかつくりました。冒頭の句のほかにも…

チェホフ忌頬髭おしつけ桃籠抱き／修司

石狩まで幌の灯赤しチェホフ忌／修司

…があります。私は自分の車旅と想いをかさねて、三句目がすきです。が、彼が、これほどチェホフにこだわったのは、何故だったのでしょうか。 また短歌では、

**チェホフ祭のビラはられし林檎の木
かすかに揺るる汽車過ぐるたび／修司**

**蓑火を床に踏みけし立ち上がる
チェホフ祭の若き俳優／修司**

**桃いれし籠に
頬髭おしつけて
チェホフの日の電車に揺らる／修司**

…というのもあります。はてさて、三句目の短歌と掲句の二句目とでは、どちらが先に詠まれたのでしょうか？

雑誌（同人誌）『暖鳥』では「チェホフ風の夜に」という座談会も開いていますし、二首目にあるごとく芝居にもかかわっていたようですから、チェホフに関心は深かったのでしょう。

でも、私が持っている三冊の文庫と戯曲作品集では、彼がチェホフをどのように捉えていたのかははっきりしません。

二十歳の頃、なぜか俳句から離れて戯曲、ラジオドラマの世界に移りました。やが

て、天井桟敷館を立ち上げ『青森のせむし男』『大山でぶ子の犯罪』など前衛的芝居を展開した彼ですから、戯曲作家・演劇人のチェホフへの思い入れも理解も深かったのでしょうし、劇作活動の出発点でもあったように思えます。

そのチェホフの『桜の園』は、かつて「喜劇か悲劇か」で論争されたことがありました。

作者自身は「四幕の喜劇」と注釈をつけたのですが、あのドラマの語りかける経緯、つまり、19世紀末から20世紀初頭のロシア、没落貴族の女主人公ラネフスカヤが、広大な領地・農園・邸を、農奴から這い上がった商人口パヒーンに売り渡して、去らねばならぬ経緯が、喜劇とは思えない人もいたのでしょう、きっと。

でも、あの芝居を観、戯曲を読み、時代背景を考えてみれば「これは喜劇だ」と気がつきます。つまり時代の潮流の中でもがき、流されていく滑稽な人物が次々と現れるドラマで、「二十二のふしあわせ」といわれ失策を連発する人物や、年代ものの大戸棚に惜別の演説をするラネフスカヤの兄などは、見た目でも滑稽なキャラクターです。

ラネフスカヤもまた、貴族でない男にいれあげて、結局は領地を喪うハメにあう悲嘆にくれ、それでもその男のいる処・パリに行こうとしている滑稽な女です。作者はそれをファルス（笑劇）ではなく、写実に徹したドラマとして描き、「人生とは、かくも滑稽である。人間とは滑稽ないきものだ」といっているように思える戯曲なのです。

つまり、滑稽の本質は、人生をやさしい眼差しで見つめることにある、ともいえ、それは、俳句の本質にも、滑稽俳句を詠む思いにもつながるのではないかなあ、と私は思うのです。

寺山修司は、その滑稽世界をきらぎらした前衛的芝居として花咲かせたのだと思いますが…。それにしても、寺山が、早々に俳句の世界から離れてしまったのが惜しまれてなりません。刺激的な作品が、いろいろとみられたと思うのですが……

皿の縁また欠く粗忽チェホフ忌

桜桃のジャムをたっぷり今朝の秋